【俺】「…頭いてぇ。流石に飲みすぎたかな…」

俺はしがないサラリーマンだった男だ。あまりに仕事が嫌だったので、勢いで辞めてしまった。
今後の事など考える事は山積みだが、今日くらいは好きな事をしてもバチは当たらないだろう。
そう思った俺は居酒屋に行き、派手に飲み明かして…。
しっかり酔っぱらっていた俺だが、何とか帰宅して寝ていたようだ。

【俺】「…とりあえず水でも飲むか…」

俺は机の上に置いてあるペットボトルを手に取り、水を飲む。
しかし、妙な違和感がある。机が妙にでかい。ペットボトルもでかい気がする。
それにこの腕、なんか変なモノが引っ付いているぞ？　一体どうなってるんだ？
俺が恐る恐る部屋の灯りをつけると、俺の目にとんでもないものが飛び込んできたのだった。

【俺】「うええっ!? な、なんでテイルレッドが俺の部屋にっ!?」

目の前の姿見には、俺がこの世で一番惚れ込んでいるTS娘である、テイルレッドが映し出されていた。

ん…? いや待て、テイルレッドが姿見に映し出されているって事は…。

【俺】「えっ…? これ、まさか俺…?」

俺は体を動かしたり、表情を変えたりする。

姿見に映し出されるテイルレッドも同じように動き、表情を変える。

体を見下ろしてみれば、慣れ親しんだイチモツは消えており、細くて柔らかそうな胴体と、

テイルギアに包まれた白くて細い手足がはっきりと見える。

これはもう間違いない、本当に俺がテイルレッドになってしまったようだ。

何故こんな事になった? 俺は居酒屋での出来事を少しずつ思い出していった。

【俺】「…そういえば、居酒屋に居る時に、妙なヤツにアプリを勧められたっけか…？」

俺が居酒屋で飲んでいた時、相席した妙なヤツから、妙なアプリを勧められた事を思い出した。
それは好きな自分に変身できるというアプリで、俺は新しいスタートに相応しいと思い、
面白半分でインストールした所、まずは外見を設定して下さいという項目が出たため、
酔っていた俺は面白半分にテイルレッドの画像を入力したのだった。

【俺】「…いやでも、まさかな…そんな事が…」

変身アプリなんて非現実的なもの、にわかに信じられる話ではない。
しかし、実際にこうなってしまった以上、それ以外に原因は考えられそうにない。
超リアルな夢を見ているだけかもしれないが、この頭痛も肌の感覚も現実そのものだ。
俺はどうしていいか分からないまま、目の前の姿見に映るテイルレッドを見つめていた。

【俺】「…まあ明日から出社しなくてもいいし、何年か遊んで暮らせるだけの貯金もあるし、今後の事は後で考えるとするか…。それよりも今は…」

そう、俺の目の前には、何年もずっと恋焦がれていた、あのテイルレッドがいるのだ。しかも、それが自分自身の姿なのだ。この状況を堪能しないという手はないだろう。俺はじっと鏡を見つめる。笑顔が可愛すぎてドキドキしてくる。

【俺】「まさかテイルレッドになれるとは…。俺、可愛すぎる…」

容姿に自信の無かった俺にとって、自分が美しい、可愛いというのは異次元の体験だ。自尊心が最高に高まり、幸福感に満たされ、いつまでも自分を見ていたい気分になってくる。それと同時に、理想の美少女を間近で見る事で、男の本能がムラムラと高まって来るのも感じてしまう。そのパンツの下は一体どうなっているのか。俺はドキドキしながらその場に座り、軽く足を開いた。

【俺】「こんな小さい子に
こんな事させるなんて
少し罪悪感もあるが、
今は俺の体なんだし、
大丈夫だよな、へへっ…」
その場に座りこんだ俺は、誰かに言い訳するように
独り言をつぶやいた後、そっとパンツの上に手を伸ばした。
するりと伸びたしなやかな指と、それを覆うスベスベの手袋が、
ぷにっと膨れ上がった股間の、同じくスベスベのパンツの上に触れる。
その瞬間、俺の全身に電撃が走ったかのような、強烈な刺激が叩きこまれた。

【俺】「ひっ！？
な、なんだ今のっ…？」
俺はどうやら、クリトリスに指を引っかけて、
強く刺激してしまったらしい。
パンツの上からでも強烈すぎる刺激。
もし指で直接オマンコをかき回したらどうなるのか。
【俺】「い、いや…まずはパンツの上からだな…」
強すぎる刺激に恐怖した俺は、パンツの上からゆっくりと指を動かして行った。

【俺】『ひんっ…♥　あっ…♥』
スベスベで着心地のいい手袋とパンツ越しに、
俺はテイルレッドのオマンコに指を這わせていく。
男の体のオナニーよりはるかに気持ちいい。
鏡には快楽を必死に耐えるテイルレッドの顔が
映し出されており、それがさらに指の動きを加速させる。
【俺】『ひっ…♥　嘘だろっ…気持ちよすぎるっっっ♥』
来森よすぎて指が止まらない。俺は猿のようにひたすら自分のオマンコをかき回し続けた。

【俺】「はぁっ…♥　はぁっ…♥
んっ…じゃあ次はっ…♥」
女の体という未知の快楽にも少し慣れた所で、
俺は指を止めて、パンツを少しずらしていくと、
興奮のためか膣口を軽く開け、愛液を滴らせた、
毛の生えていないピンク色のオマンコが露になった。
【俺】「こ、これが女の…テイルレッドの…オマンコっ…♥」
このオマンコを無茶苦茶にしたい。俺は再び指を伸ばし、オマンコを直接かき回し始めた。

【俺】「ひっ！　あっ！
あああぁぁあっっっ！！！」
パンツ越しですら気持ち良かったオマンコ。
直接触れてかき回す感覚は異次元のレベルだ。
気持ちよすぎて何も考えられなくなってしまう。
まだ夜明け前なのに卑猥な声が止まらない。
指を動かす度に体がビクンと跳ね上がる。
気持ちいい。気持ちよすぎて指が止まらない。
俺は無我夢中でオマンコをかき回し、何度も絶頂に達し、
女の体を、テイルレッドの肉体を貪りつくしていった。

【俺】「はぁっ…♥　はぁっ…♥」
俺は夢中でオナニーし、何度か絶頂した所で、隣の部屋から壁を叩く音を聞いて我に返った。隣の住人からは、俺が夜中に大音量でAVでも流してると思われたのだろうか。
【俺】「んっ…♥　さ、流石にこの外見で、近所とトラブルを起こすのはまずいよな…♥」
程よく疲れていた俺は、いったんオナニーをやめ、再び眠りにつく事にした。

【俺】『ふぁ…良く寝た…。おおっと…』
俺はベッドから起き上がるが、まだテイルレッドの体であり、体のサイズ変化に対応できず、ベッドから転げ落ちた。
二日酔いかつ、オナニーのしすぎで疲れ切った俺は、丸一日寝ていたようだ。
時計は午後9時を指している。
【俺】『ん…飯を買いに行かないとな…』
そう呟いた所で、この外見で出かけなければならない事に気が付いた。
こんな美少女がこんな服装で外に出るのだ。
想像するとドキドキしてしまう。
【俺】『…ここ秋葉原だし、まぁ大丈夫だろ…。ついでに何か服も買うか…』
俺はそう呟き、その恰好のまま外へと歩み出した。

【通行人】『うわ、あのテイルレッドのコスプレイヤーさん、完成度高すぎだろ…』
【通行人】『背も低くて体も細くて、マジで○学生くらいにしか見えないんだが…』

俺は人目を避けながら秋葉原まで移動したが、この時間では秋葉原はまだまだ人が多い。
ただでさえ美少女のテイルレッドが、テイルギアに身を包んでいるのだ。目立たないはずがない。
俺はたちまち注目を集め、噂の中心になってしまった。

【俺】『…そりゃ注目集めるよな…本物にしか見えないもんな俺…』

しかし、注目を集めるのは、美少女である事を自覚できるし、そんなに悪い気分はしない。
男の俺はブサメンだから、こんな風に噂の中心になる事なんて一切無かったから新鮮だ。
俺はドキドキしながら、注目を集めながら秋葉原の街を歩き、コンビニで軽く買い食いをした。
次は着替えを調達しなければ…しかし一体どこで買えばいいんだろう？

【俺】『…コスプレ衣装を売ってるお店なら、何とかなりそうかな…』
流石に、この背丈の女の子の服を売っているお店なんて知らないが、
いつもエロ本を買いに行っていた小汚い雑居ビルの一室に、
アダルトグッズやコスプレ衣装を売っている店がある事を思い出した。
しかし、俺が雑居ビルの階段を上ると、運悪く数名のDQNに遭遇してしまった。

【DQN】「おお？　こんな時間にコスプレ美少女はっけーん」
【DQN】「めっちゃロリロリしてて可愛いじゃん。それ何のコスプレ？」
【DQN】「このビルに入ってる店分かってる？　それともそういうアイテム買いに来たの？」
【俺】「い、いやっ…俺は…そのっ…」
突然の事で狼狽える俺をDQNは取り囲み、俺はそのままビル内のトイレへと連れ込まれてしまった。

【DQN】「そんな見た目してても、この時間にそんなビルに来るって事は、君は成人女性で、そういう趣味の持ち主って事だよな？」

【DQN】「合法ロリってやつだな。AVでもたまに見るぜ。君ほどの美少女は少ないけどな」

よく見るとDQNは股間を膨らませている。このままではレイプされてしまうかもしれない。

そこまで考えた所で、俺は今、テイルレッドである事を思い出す。

【俺】「そ、そこまでにしておかないと、痛い目を見ますよっ！」

【DQN】「へえ？　俺達に歯向かおうっての？　面白いじゃねぇか。ほら、やってみろよ」

DQNは愉快そうな笑みを浮かべ、舐めちぎったように、無防備な体制で俺に顔を近づける。

しかし、テイルレッドに変身した俺は無敵のはずだ。こんな奴、一撃で倒せるはずだ。

俺はDQNの顔を思い切りパンチする。しかし、パンチは一切効いていないようだった。

【DQN】「そんなパンチ痛くも痒くもねぇが、それでも先に手を出したのはお前だからな？」
【俺】「ひっ…！　まさか、わざと殴らせたのかっ…？」
そう言ってDQNは俺の体を抱え上げ、両足を大きく広げた状態で持ち上げた。
体重が三十キロにも満たないテイルレッドの肉体は、
軽々と持ち上げられてしまう。
【DQN】「お前みたいに小柄だと、こういう恰好はよく似合うな」
【俺】「うっ…やめっ…」
俺はトイレの鏡に映し出された自分の姿に、ピンチであるにも関わらず、生唾を飲み込んだ。
あのテイルレッドが、こんな格好をしているのだ。興奮しないわけがなかった。

偽テイルレッド（初期）
年齢：？？歳
職業：無職
身長：129㎝
体重：26kg
B61・W48・H64
初潮前
処女
【ステータス】
戦闘力　：☆
柔軟性　：☆☆☆☆☆
瞬発力　：☆☆☆
持久力　：☆☆☆☆
筋力　：☆
膣圧　：☆☆☆☆☆
膣容積　：☆
子宮容積：☆
感度　：☆☆☆☆☆
【経験】
無し
【特殊能力】
テイルギアの瞬時着脱